

書評：『ネクサス・コモンズ：イノベーションを超える創生空間のつくり方』

日本ナレッジ・マネジメント学会 理事  
立教大学経営学部 准教授  
西原 文乃

イノベーションをテーマにした本は世の中にあふれている。イノベーションが求められていることの現れだが、唯一無二の決定的な方法が無いことの裏返しでもある。その内容は人や組織、方法、仕組みなど様々で、その多くは有名な経営者、スタートアップなどがこれまでにない手法で新たな価値を生み出す、といったサクセスストーリーだ。

しかし、この地上には多様な人々が多様な仕事に携わっている。そこで著者らは、こうした数少ない秀逸な人々によるイノベーションではなく、より多くの凡庸な人々でも成し得るイノベーションの方法を探求した。対象は、2012年から実施されている名古屋大学の協創スペース「教養教育院エース・ラボ S 教室」での実験的授業である。これは、著者であるデザイナー（実務者）の前田明洋とアカデミアン（学者・学会理事）の栗本英和が行ったプロジェクト・ベースの実習（PBL：Problem/Project-based Learning）プログラムだ。ここで得られたログの解析が、本書の確固たる基盤となっている。

本書では、はじめに日本のイノベーションの傾向と課題を概略したのち、第1章では発動のメカニズム、第2章では「創生の場」を説明し、第3章ではやや趣を変えて、イノベイティブ思考とリベラル・アーツ教育について解説している。そして、第4章と付録AとBでは、実際の事例に基づいて実践的な方法が示されている。

ナレッジ・マネジメントの研究者として、私の観点でもっとも興味深いのは第3章だ。ここでは、野中郁次郎一橋大学名誉教授が提示したSECIモデルを全面的に取り入れたうえで、SECIモデルのバージョンアップを図っている。特に注目すべきは、「共同化（Socialization）」フェーズの読み替えである。共同化は暗黙知から暗黙知への変換フェーズで、個人同士の共感から新たな暗黙知が創出される。組織的な知識創造のプロセスを示す野中版SECIモデルでは、個人と個人との「間」に注目して「共同化」という名称になっているが、著者らは個人の「中」で起きるプロセスに注目して「結晶化」と読み替えた。さらに、「結晶化」では個人の「中」でもSECIモデルと同様の活動が起きていると捉え、「結晶化」にSECIモデルを入れて、SECIモデルのフラクタル構造化を行った。これは、私が密かに「ひとりSECIモデル」と呼ぶ考え方（個人の中でもSECIモデルは回るといふ仮説）と似ており、SECIモデルは元々フラクタル構造なので、共感できる考え方だ。個人の「中」と、個人と個人との「間」で起きていることを、環境という場において、さらに構造化できれば、だれもが納得できるものと思う。

イノベーションは実践されて、新たな価値を生まなければ、どれだけ素晴らしいモデルが示されたとしても、意味がない。その点でも、本書は実際にイノベーションを起こすことを目的とする授業から得られた知見を基盤にした内容となっており、実務家が読んでもすぐに応用できる点が多い。本書によって、多くの凡庸な人々が数少ない秀逸な人々と共に光り輝く価値を生み出せるようになることを期待する。